

川端康成：夢とモダニズム

メベット・シェリフ

キーワード モダニズム、フロイト、自由連想、精神分析学

I 初めに

この論文では、川端康成文学における夢がフロイトの思想によって形成されていることを論じる。さらに、川端がフロイトの思想を用いた理由として、彼が主観的な描写を重視していたためであることを説明する。主観的描写とフロイトの思想との関係を明らかにしながら作品における二つの夢について考察し、その機能を分析する。

II 川端の言語への不信

1890年代以降、日本の自然主義文学は海外のそれと同様、あくまで客観的な態度によって書かれた文学である。¹独歩や花袋等の作者は心の内面状態を取り入れることを避けていた。しかし、川端や伊藤整や横光利一やその他の新感覚派のメンバーは、この客観的な見方を否定し、認識論やジョイスの「意識の流れ」を受け止め、主観の重要性を主張していた。簡単にいうと新感覚派の新しい点は、人物を内面から描くという主観性に基づいているところにある。²この内面の描写は自然主義とモダニズムの最も重要な相違点かも知れない。人物の内面、つまり精神を描くことはモダニズムの諸特徴の一つである。

¹ 例えば、田山花袋は次のように彼の文学概念を説明する。「客観の事象に対して少しもその内部に立ち入らず、又人物の内部精神にも立ち入らず、ただ見たまま聴いたまま触れたまま現象をさらながらに描く。」「『生』における試み』(小田(1977)『日本近代文学大辞典第二巻』377頁。

² 川端は「新進作家の新傾向解説」で次のように書いた。「…野に一輪の白百合が咲いてゐる。この百合の見方は三通りしかない。百合を認めた時の気持は三通りしかない。百合の中に私があるのか。私の中に百合があるのか、または、百合と私とが別々にあるのか。…省略…百合と私とが別々にあると考へて百合を描くのは、自然主義的な書き方である。古い客観主義である。」

川端は文章論にかなり時間をかけて考えていたようで、それについて数多くのエッセイを書き、その中で言語学的な問題にも触れている。客観と主観との対立という問題も、繰り返し現れてくるテーマである。川端の理論で客観とは、社会的な思考や言語のことである。その中、人間は一人一人個性を持っているが、言語によってコミュニケーションを取ろうとする際、その主観性は客観的である言語になると失われる部分があると考えられる。シニフィエとシニフィアンは恣意的に繋がっているために、伝達を可能とするのは社会的な契約だけである。川端は文芸を「契約芸術」または「媒介芸術」³と呼び、さらに川端は「言葉は人間に個性を与えたが、同時に個性を奪った。」と書いている。すなわち、主観で感じることは完全に言語で表わすことができないので、物事を伝えようすると、必ず感情と言葉の間にギャップが生じるというのである。

「新進作家の新傾向解説」⁴（1924年）というエッセイで、川端は上のような問題について考察し、特に言語は人間の「主観」を完全に表象できないということ巡って悲しい声を上げている。川端は小説の中で、言語という媒介を使わずに直観を読者に伝えることを願っている。しかしながら、文学は必ず言語を必要とするために、完全に言語化される前の人間の主観を書き出すことは不可能である。川端はこの問題を部分的に解決する方法をダダイズムに発見したという。ヨーロッパにおけるモダニズム芸術運動の最先端に立っていたダダイストたちは、伝統の習慣や仕来りをすべて否定するという特徴を持っていた。⁵川端は「新進作家の新傾向解説」で次のようにダダイズムの詩論を解説する。

ダダイストの詩は、時によると単語の無意味な連続に近く、きれぎれな心象の羅列に過ぎない。これは、詩人の頭の中の自由連想の表出であるから、他人には分からないのである。最も主観的であり、直観的であり、同時に感覚的である、と云へるのである。同じく分からないという点に於いて、人々は象徴主義の詩を連想する。しかし強ひて云へば、象徴主義は理知的であり、ダダ主義は感覚的である。⁶

川端はスタイルに対する次の二分法思想を持っていた。片方には自然主義

³ 川端康成（1977）『小説の研究』70頁

⁴ 川端康成（1980）「新進作家の新傾向解説」『川端康成全集第三十巻』新潮社173-183頁

⁵ この運動のメンバーは第一次世界大戦時における大規模の流血からショックを受けて、芸術の様々な形式または理論そのものを含めて従来の制度に反逆する。MacLeod（1999）209頁

⁶ 川端康成（1989）「新進作家の新傾向解説」『川端康成全集第三十巻』新潮社 180頁

に見られる陳腐な客観的表現があり、もう一方には人物の内面や直観を再現しようとするダダイストや新感覚の作家たちの主観的表現がある。川端にとっては主観性が斬新的ではあるが、それによって分かりやすい小説を書き出すことは困難である。なぜならば、人間と人間を繋ぐのは客観性のある共通の意味システム（言語）であり、以前の世代から受け継ぐものだからである。上記に述べたようにダダイズムの芸術家は伝統的なものを拒否することに特徴がある。しかし川端が見たダダイズムは意味そのものを否定するのではなく、陳腐な客観的表現を否定し、個人的かつ、ユニークな表現を高く評価している。この主観的かつ非言語的な要素を文学作品に表現するために川端はフロイトに由来する手法を取り入れるのである。川端はフロイトが治療で利用していた「自由連想」の概念と文学の関係を次のように説明している。

心理学説中でまだ年若い一派に「精神分析学」と云ふのがある。この派の学者は夢を分析するのに「自由連想」と云ふ方法を用ゐる。精神分析をここに紹介する必要はないが、この自由連想について少し云ひたい。この分析法を用ゐる時に、心理学者は患者、云ゐかえると被分析者を、安楽椅子に座らされたり、寝椅子に横たわせたりする。つまり、体の筋肉が弛む楽な姿勢を取らせる。それから、夢の一片、例へば患者の夢の中に蛇が現れたのだとすると、その蛇に就いてその時心に浮かんで来るものを、片っ端から、出来るだけ早く、何の秩序もなしに云はせる。蛇の連想を自由に述べさせる。そしてその連想から、この患者は何故蛇の夢を見たかと云ふ心的経過を洞察する…（省略）…精神分析学者は、このとりとめない自由連想に、心理洞察の鍵を見出した。そしてそこに、ダダイストは新しい発想法を見出した、と私は思ふのである。⁷

（強調は筆者による）

このエッセイで三段階の過程を経て、川端のスタイルの一部が誕生したということが見えてくると私は思う。第一段階はフロイトが治療で用いた「自由連想」によって非言語的である無意識の世界を解明できるという思想である。第二段階はその「自由連想」を文芸の世界に持ち込むダダイズムである。第三段階は「自由連想」によって、客観的である言語表現を通して人物の主観を描き出すことである。この三つの段階の共通点として見られるのが言語への不信である。フロイトは言語化された患者の談話や夢の内容を表面上の価値として捉

⁷ 川端康成（1980）179—80頁

えず、むしろ心的真実へのメタフォアまたは歪みとして見ていたのである。それと同様にダダイズムは言語を含めて既存の習慣や仕来りや形式などを否定する運動である。そして川端は、ダダイズム文学における自由連想の描写手法を使い、主観および無意識を描き出すことができるスタイルを発見しようとしていたのである。⁸

Ⅲ フロイトと新感覚派

フロイトによる無意識の発見というコペルニクス的転回は日本では1930年代初頭公の場で話題となり、文壇に流行していたと言ってもよい。1924年の「新進作家の新傾向解説」で、川端がフロイトの思想をある程度把握しているということは川端の前衛性を物語る。さらに、川端はフロイトの思想に大きく影響されたジョイスの『ユリシーズ』⁹を賞賛していた。

特にジョイスは『ユリシーズ』の最後の一章で、自由連想によって人物の思考過程を内面から描き出そうとしている。このスタイルによって、読者に人物の新たな姿を見せることができる。川端は「文章」、「ジョイスの言葉から」、「性格と心理」などのエッセイでこのような側面を主観性的として高く評価している。

フロイトによると、人間の無意識は非言語的で混乱した、知られざる巨大な精神の一部である。自由連想を使って無意識の内容を探り出して言語化する際、個人的・主観的無意識の思考は、社会的・客観的言語に多少とも無理やりはめる必要がある。個人の主観性と社会の客観性の間に隙間は当然ある。その隙間をなるべく小さいものにするために、意識の流れ（自由連想）の手法を用いたのは川端だけではなく、伊藤整、堀辰雄、など昭和初期の作家たちであった。川端は、「水晶幻想」と「針と硝子と霧」という二作の短編を1930年初頭に世に出した。特に「水晶幻想」で、意識の流れ（自由連想）が使われている。「水晶幻想」には、混乱した内面独白のような文章がある。¹⁰この意識の流れは不可解な文章のように感じられるが、よく検討するとこれらの自由連想は主人公の女性の精神生活と隠れた願望について様々のことを語っている。しかしながら川端はその後、意識の流れを小説に用いることをやめた。その理由について川

⁸ 川端の思想はある程度ソシュールのだが、片山倫太郎（2000）によるとこれは大正11年（1922）の神保格の『言語学概論』に由来している。

⁹ Humphrey（1958）p.43 等によって『ユリシーズ』における意識の流れはフロイトの自由連想に深く関わっているという。

端は、意識の流れでは「人間が従となり、スタイルが主となる。」と説明している。¹¹しかしながら、それ以降自由連想の手法を捨てたわけではなく、特に数多くの作品に現れる夢の描写においては大いに利用している。これらの夢によって、川端は単に幻想的な世界を描いているのではなく、登場人物の無意識を極端なまでの主観性でもって描き出しているのである。以降、二つの例を取り上げて、夢の構造と作品中の役割を解明したいと思う。

Ⅳ テキストの中のフロイト主義

「弱き器」の場合

川端は夢をテーマとした小説を数多く世に出している。特に早い段階で夢を問題とした短編小説の一つは「弱き器」である。この小説は1924年に『現代文芸』に発表され、現在『掌の小説』に収載されている。「弱き器」は2ページにも及ばない短い作品で、勿論その構造もシンプルである。最初のシーンでは昼間の現実的な経験を描いている。その次のシーンで、最初のシーンの後に見た夢が描かれている。いくつかの個所にフロイトの影響を見つけ出すことができる。この夢の分析に入る前に、フロイトの夢についての思想を再び考えたいと思う。フロイトによると夢は2つの側面から成り立っている。一つは、眠る人が見る顕在的な夢である。他方には、その夢を作り出す材料となる潜在的なテキストである。潜在的な夢のテキストは元の夢思想であり、夢の本当の意味とも言える。このテキストの内容を解明することが夢分析の目的でもある。フロイトは顕在の夢のテキストは潜在の夢の象徴的歪曲だと考えていた。勿論この二つのテキストの間にはギャップがあり、このギャップは元の潜在的テキストが顕在的テキストに翻訳される時、生じるずれである。¹²

ここで「弱き器」に戻る。最初のシーンに主人公は道を歩いているところで、

¹¹ ここで「内的独白」という言葉を使ったが、普通はこの用語はブルースト（1871-1922）や、ドストエフスキー（1821-81）などの文章法を指す。この手法では主人公の考えていること、または回想が描写されているが、「意識の流れ」と違って、人間の思考によって整えられた文章によって表現されている。これと対照的にジョイスやウルフ、そして、川端の「水晶幻想」においては、無意識から意識へ入ってくる事象を再現している。ブルーストなどの文章は整然として、客観的であるがゆえに実際に混乱した無秩序な人間の心を描いてはいない。しかし現実には人間の心を描くには、主観的な描写が必要であると思われる。「意識の流れ」では、ブルーストの「内面独白」と違って、人物の精神をその人物が自分の意識を経験するように描き出されている。

¹² 川端康成（1977）『小説の研究』講談社 66頁

骨董品店の前に置かれた陶器の観世音の像を見て、道の方へ転んでしまうのではないかと考える。そして次のシーンでは主人公の夢が描かれている。その中に観世音の像のイメージが現れ、主人公の方へ転んでくる。そして、陶器である像の片手だけが人間のように生きた肉体となる。その生きている腕の怪奇性に主人公は驚き、像から離れようとするので観世音が地面に落ちてばらばらになってしまう。次の瞬間、主人公は彼女という恋人らしき人物が観世音のかけらを集めていることを見て目が覚める。

夢の後に、主人公が自分の夢の分析をしているところが描かれる。まず主人公は「夢に意味を付ける」といって、「汝等も妻をあつかうことを弱き器の如くせよ」というペトロ第一の手紙の引用を朗読する。この引用は夢のシーン、つまり顕在の夢のテキストに現れているわけではなく、その夢の元のテキスト(潜在の夢思想)である。すなわち、聖書の引用は夢思想という元のテキストとして短編に現れている。フロイトの夢分析と同様、川端の小説で顕在のテキストは潜在的夢の思想のメタフォアとして出てくるのである。聖書の引用の元の意味とは関係なく、「妻」というイメージは観世音の欠片を集める「彼女」に繋がる。川端はこの夢の意味の結論として次のように書いている。

そして今私の夢の中で、彼女は彼女自身の割れたかけらを、いそがしげに拾い集めているのではなからうか。¹³

女性＝観世音＝救済者という三重のイメージは川端の作品によく出るテーマであるが、「弱き器」の場合ではこの背景にフロイトが指摘した「圧縮」¹⁴という夢作業を考察してみることがよいのではないかと思う。

観世音と彼女との統一したイメージだけではなく、幾つかのイメージは「宗教」の中心点の周りに定着している。松阪(1983)は仏教の観世音の像とペトロの第一の手紙がどのような関係をもっているかについて次のように説明している

わたし(引用者注:松坂)は、『聖書』と「観世音の像」の、一見矛盾とも思える組み合わせをとりたてて云々しようというのではない。むしろそ

¹² 心理学で、あるものに、二つ以上のものの特性が重複すること。夢、あるいは神話、精神分裂病者の絵などに見られる。

¹³ 川端康成(1980)『川端康成全集第一巻』「弱き器」27頁

¹⁴ 圧縮とは無意識に存在している多数の要素が夢のなかで一つの対象によって象徴されている現象である。

の逆で、それは作者の中に存する『聖書』と「観世音の像」ーキリスト教と仏教ーのイメージのあり方を、象徴的に示していると思うのである。¹⁵

しかしながら、私はまた違った観点からこの統一された夢のイメージを分析してみたい。すなわち、2つの異なる宗教のテーマが一つの概念に統一されていることは圧縮という現象である。フロイトの思想の中で、圧縮以外に転位という夢作業もある。転位においては元の潜在の夢思想で中心的なテーマとなるものが顕在の夢では、些細な役割を果たすことが多い。「弱き器」の主なテーマは、「彼女」という人物の心が脆いという性質であるにもかかわらず、顕在の夢の中で彼女は最後の瞬間にしか出てこない。彼女が夢の主な主題であるということを理解するにはかなり長い検討が必要である。

「新進作家の新傾向説明」で川端はフロイトの夢判断や自由連想についての知識があるということが明らかになっている。さらに登場人物の描写において、従来の手法では描くことができなかつた意識下の心的行動を描くことを狙っており、人物の主観性を表わすことを試みていた。つまり川端は、究極な主観性という特徴を持つ無意識を表わそうとしている。そのために、「弱き器」の中に圧縮と転位という夢作業の現象も再現していると私が考えている。フロイトの手法を用いている作品は大正後期頃に限ったわけではなく、夢の描写における自由連想の手法は晩年まで続いていたものである。ここで夢が登場する五十以上の作品の中から、もう一つの例を取り上げたいと思う。

V 『山の音』の場合

『山の音』の第一章は1949年に「改造文芸」に発表された。そのあと幾つかの雑誌に断続的に五年間に渡って掲載された。鶴田欣也（1981）は『山の音』に出てくる八つの夢をフロイト的な観念から分析して、主人公の信吾の無意識に隠れた欲望に光を当てた。¹⁶鶴田によると川端が、これらの夢で人間の感覚の多元性を描き出しているということを指摘している。しかし、本稿では何のために夢を取り入れたかという問題も考察したい。「弱き器」と同じように、『山の音』における夢は顕在と潜在のテキストを有している。覚醒した主人公が顕在の夢を考察して、潜在的テキストの内容について探り出そうとする場面もあ

¹⁵ 松坂俊夫（1983）『川端康成「掌の小説」研究』頁

¹⁶ 鶴田欣也（1981）『川端文芸 純粋と救済』明治書院 181頁

る。本稿で全ての夢を取り上げることはできないが、代表的なものを検討しておきたい。ここで取り上げる夢は作品の四番目の夢であり、第8章の「夜の声」に現れる。勿論、夢の顕在的な内容は作品の中に出てくるが、その元の潜在的夢思想のテキストを知るには検討が必要である。この夢の主なテーマは「聖少女」であるので、この夢を「聖少女の夢」と呼ぶことにする。「弱き器」の夢は全知のナレータによって描かれており、あたかも夢を見ている主人公の頭の中を覗くように視覚的聴覚的に描かれている。それと違って「聖少女」の夢は作品に直接に出てくるのではなく、夢を見た後の回想を通して読者に伝えられる。つまり、『山の音』で川端は、客観的な描写を避け、主人公の主観的観点から夢を描いている。川端が目指していた文章のスタイルでは、実際にあった出来事を描くよりも、人物がどのように感じ取ったかという問題の方が遥かに重要視されている。「聖少女」の夢は次のように描かれている。

『修一の声で起きる前にも、信吾は夢で目がさめたのだった。その時は夢をよくおぼえていた。ところが、修一に起こされた時は、夢をほとんど忘れてしまった…省略…おぼえているのは、十四五の少女が墮胎をしたということと、

『そうして、なにに子は永遠の聖少女となったのである。』という言葉だけだった。

信吾は物語を読んでいた。この言葉は、その物語の結びであった。

物語を言葉で読みながら、同時にその物語の筋が、芝居や映画のように、夢に見えるのだった。信吾は夢のなかに登場しないで、まったく見物人の立場であった。

十四五で墮胎をして、聖少女とは奇怪だが、それには長い物語があった。感傷純愛の名作物語を、信吾の夢は読んでいたのだった。…¹⁷

(強調は筆者による)

夢から覚めて、主人公の信吾は夢の意味を定めようとするが、忘れた部分が大きいということに気がついているように書かれている。特に、少女の名前が夢に現れたと信吾は考えているけれども、それも思い出せない。そして、まず、少女は妻の姉の面影であると考えて見るが、すぐそうではなさそうだと考え直す。しかしながら信吾が少女のアイデンティティを決定しようとした場面で妻の亡き姉のことが頭に浮かぶということには意味がないとは言えない。死んだ

¹⁷ 川端康成(1980)「山の音」『川端康成全集第十二巻』新潮社381-2頁

姉を夢の少女に繋げようとするを取りやめた理由は、前日見た新聞に載った青森県での墮胎した高校生についての記事である。それが唯一の夢の原因であると信吾は思ってしまう。信吾はフロイトの知識を持っている川端と違って夢の中に、一人の人物が二人以上の人の記憶によって形成され得ることを思ってもいないからであろう。夢で見る人は現実存在している一人の人間の模倣であるという通念が背景にある。また前日見た新聞の記事も夢の原因の一つとなるのであろうが、「永遠の聖なる少女」というイメージをその記事の中から見つけることは難しい。作品全体を考えて見て、はじめてこの意味が解明できるのであろう。その鍵となるのは若くして死んだ妻の姉のイメージである。若くて美しい妻の姉が若死にしたからこそ、信吾の心のイメージとして永遠とその若さと美しさを保つことができるがゆえに「永遠」というテーマが連想されているのではないだろうか。信吾にとって、亡くなった姉は観音的な存在という要素をもつために「聖少女」という連想も可能である。従って妻の姉のイメージはこの夢の由来である。そして、もう一つの由来は新聞の女の子である。新聞の女の子が記事で、墮胎をしたくないと言い、はらんだ赤ん坊が愛によって作られたと主張したことに信吾は印象を受けたようである。信吾が「聖なる少女」によって救われたいという願望をもっていることが次の引用で明確となる。

信吾は夢で、墮胎の少女を救い、また自分をも救ったのかもしれない。

この二人の女性のイメージは信吾の言葉では表わせない若い女性による宗教的救済願望の現れであると見ることができよう。

川端は夢における自由連想を描くことによって「主観に忠実となり、直感的となり、同時に感覚的となって来たのである」。¹⁸『山の音』に見られる信吾の内面的な描写は、夢なくして表現できないものである。さらに川端がフロイトの思想を踏まえて書いていることによって、信吾の主観性（つまり無意識）を表現することを可能にしているのである。

VI 結論

大正の終わり頃、川端の文芸の目標は言語の客観性を乗り越えて、主観性を小説に描き出すことであったと考えられる。近代の作品においても古代文芸に

¹⁸ 川端康成（1980）『川端康成全集第三十巻』「新進作家の新傾向解説」新潮社181頁

おいても夢の描写というものは決して稀なことではない。しかし川端は、人物の主観性を描くことという目的を果たすためにフロイトの思想を踏まえて、作品に潜在の夢と顕在の夢を両方取り入れているのである。

本稿に取り上げた二つの作品における夢は断片的であり、主人公によって忘れられつつあるところもある。さらに圧縮と転位という夢作業の要素もある。そして夢の意味がメタフォアの彼岸に隠れているという特徴も認められるので、人間が実際見る夢との類似点が多いということが分かる。川端の文学で、夢は登場人物の主観性を描くために導入されており、その夢の背景に、フロイトの自由連想と夢作業の思想がある。ここで見た夢は、主人公の主観性を客観的である言語を通して描き出す工夫である。言語の客観性を乗り越えて主観性を描写するという目標を果たしていると捉えることができる。

参考文献

- 小田切進（編）（1977）『日本近代文学大辞典大②巻』講談社
- 片山倫太郎（2000）「川端康成の思想構造」『国語と国文』pp.100-111（平成12年5月号）
- 川端康成（1977）『小説の研究』講談社
- （1980）「新進作家の新傾向解説」『川端康成全集第三十巻』pp.173-183 新潮社
- （1980）「弱き器」『川端康成全集第一巻』pp.26-7 新潮社
- （1980）「山の音」『川端康成全集第十二巻』新潮社pp.172-541
- 高橋義孝（1968）『フロイト著作集第二巻』人文書院
- 鶴田欣也（1981）『川端康成の芸術純粋と救済』明治書院
- 松坂俊夫（1982）『川端康成「掌の小説」研究』教育出版センター
- 原 善（1987）『川端康成の魔界』有精堂
- Hampfrey, R (1958) *Stream of Consciousness in the Modern Novel*. Berkeley University of California Press.
- MacLeod, Glen "The Visual Arts" In M. Levenson ed. (1999) *The Cambridge Companion to Modernism*. Cambridge : Cambridge University press.